

1. 筆の構造

筆は、筆管と穂首によって成り立っています。

図1 筆管

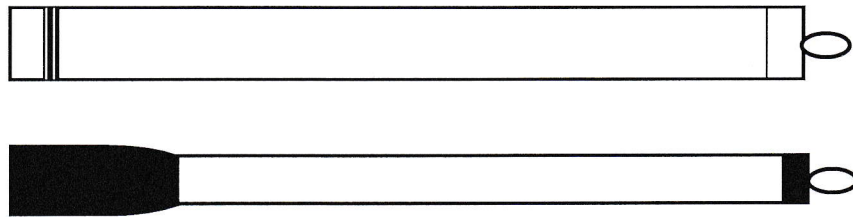
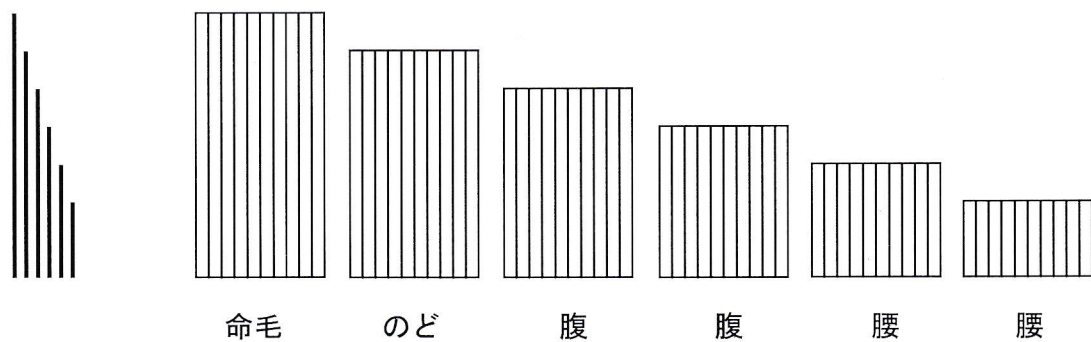


図1のようにストレートの軸（直管軸）または、毛の付け根の部分が膨らんでいる（ワシ型軸、ダルマ軸）の2通りに大別できます。また、軸には、絵付け（蒔絵）をした軸、塗り軸、象嵌軸、螺鈿軸など、いろいろな装飾軸がありますが、軸がどんなに素晴らしくても穂首とのバランスが大切です。

図2 穂首の構成



穂首の毛は、芯毛（命毛）、腹毛、腰毛と大別されます。図2のように、腰、腹、のど、芯毛（命毛）を順に混ぜると、先の尖った筆の形になります。

2. 原料について

良い筆を造るためには、まず、良い原料を確保することが重要です。使用原料となる毛の確保は、筆造りの最も基本的なことであると同時に、一番神経を使うものであり、この毛の選別が筆の性格をほぼ決定づけると考えてよいのです。穂の原料としては、獣毛、鳥、植物の三つが考えられ、今日ではナイロンによる毛の開発、工夫も行われています。

原料のうち、哺乳類動物である獣毛は、筆というイメージとして私達に身近に感じられる原料の一つです。これらの毛は、鳥も含めて、産地、気候などによって、毛の持ち味が異なり、また、同じ一頭から採取した毛であっても、その生えている部分である背すじ、肩、腰などによって、毛の弾力、採取時期によっても性質というようなものが違ってきます。

①動物毛

動物毛は、大別すると、外毛と内毛に分けられます。外毛は、外気から体を守り、雨や風をしのぐ部分にある毛です。つまり動物の一番外側にあたる毛だと考えてよいのです。また内毛は、外毛のさらに内側に生えた毛で、柔らかく細い毛です。このうち筆に適しているのは外毛で、これらは主に太くて長く、ほぼまっすぐに生えているという特徴があり、これが筆に適する要素です。

②鳥

鳥を使った筆は、筆といっても、本来、筆の持つ性格とは別のもので、趣味的性格が強く、動物毛とほぼ同じような条件の筆を造るということは不可能に近いです。

これはその鳥の羽を生かして、その毛の持つ面白い特徴を、表現のテクニクとして用いるというのがネライです。

③植物

植物の繊維を筆に仕立てたものもあります。この筆は、動物の毛の筆のできる古い時代に木の枝を折り、あるいは竹をとり、それを石のようなもので砕き繊維質だけを毛筆状にしたものです。

竹筆で代表されるように、動物毛ではなしえない線の表現化が特色です。

3. 原料の種類

・羊 毛



^{めんよう}綿羊でなく江南（揚子江の南）に棲息する山羊です。山羊は、二十種類位いるといわれ、それぞれ持ち味が異なります。粘りのあるものから、さばさばしたものまで丈が長く、先が良く利き、墨含みが良いのが特徴です。高級品から並品まで広く使用されますが、中でも背首附近を溜めて造る細光鋒は、最高級品です。

羊毛は、他の毛を混じえずによい筆となり、柔らかいために摩擦による消耗が少な

く、寿命が長いことも特徴で、太筆から小筆まで向いています。

・馬 毛



馬胴毛、尾脇毛（天尾）、たてがみ、脚毛、つり毛などがあります。この毛の場合、北アメリカ、カナダ産のものが品質がよく安定しています。毛が剛強で、尾脇毛では一種類の毛質で筆が造られますが、胴毛は小筆の芯に用いられています。また、化粧毛にされる毛もあります。

馬毛は、毛の丈が長く腰が強いので太い長鋒を造るのに適しています。

・鹿 毛



毛は太くて硬く、先は鋭く尖っています。毛の根元が空洞になっていて、墨の含みがよいのが特徴です。弾力は強いのですが、まとまりに欠けますので、穂の根元に力毛として使います。夏に取った毛を夏毛、冬に取った毛を冬毛と呼びます。

・狸毛



狸毛は、根の部分が細く、先端になるにつれて太くなるのが特徴です。したがって、毛先は弾力があって丈夫ですが、根元になるほど腰が弱くなっています。

そのために、狸毛には根元に腰の強い毛を混ぜ、穂の腰を補強する必要があります。

また、先が弾力に富んでいるので、剛毛筆の命毛に用いられます。

・鼬毛 (いたち)



鼬毛は尻尾の毛だけを使います。毛先が細く弾力が強いので、毛質はすこぶる良好です。中国の北部からモンゴル、更にロシアなど、寒い地域に棲息するものほど毛質が良好です。特にコリンスキーと呼ばれるロシア産のものは、毛が長く弾力もあって、高級品として珍重されています。

・猫毛



猫毛は、毛が短いので小筆が中心です。「玉毛」とも呼ばれる猫毛は、綿毛が多いので、穂に適した硬毛を選び出すのはなかなかのことです。

毛質は、粘りがあり、先がよく弾力に富んでいるので、面相筆、極細字筆などに用いられています。日本で産出されます。

・麝香猫毛 (じゃこうねこ)

強い弾力があり、先が良いので少ない毛の量で効果があがります。ほとんど小筆の命毛などのように他の毛と混ぜて使われます。

中国、台湾、マレーシアに棲息しています。

・兎毛

極少量が羊毛に混ぜて使われる程度です。毛先がよく利き、弾力に富んでいます。

・貂毛 (てん)



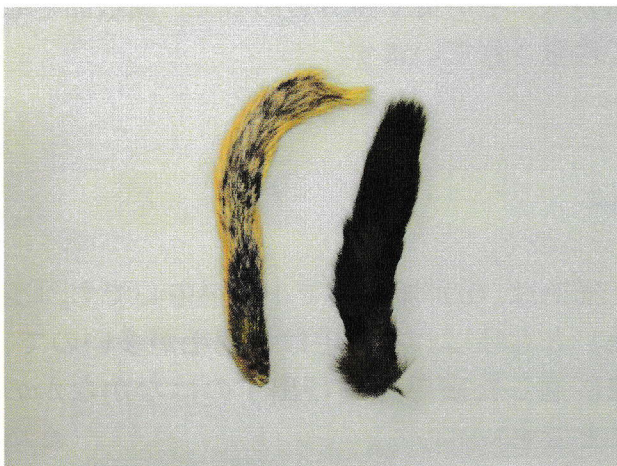
貂は猫ほどで、毛にふくらみがあり、毛が最も優秀といわれています。黄色が上質とされ、暗褐色のものは劣るとされています。

先に弾力があり粘りもあり、尾の部分が最上品とされています。

・狼毛

狼でなく、イタチ科の動物で日本には棲息せず中国の北方に棲息しています。先が利き弾力も強いのですが、丈が短いので主に小筆が造られます。

・栗鼠毛 (りす)



鼬、貂に似ていますが、弾力に乏しいので他の毛と混ぜて用いられます。毛が美しいことから化粧毛として重宝がられています。

・野衾毛 (のぶすまげ)



むささびといわれる動物です。毛丈が短く、毛質は、一匹の中でもその場所によって剛柔があります。柔らかいところは羊毛と同じ位で、他の毛と混ぜて使われることが多い。

・山馬毛



馬ではなく、馴鹿（かもしか）、羚羊（となかい）をいいます。毛は太く、馬毛より剛強です。今日では、ほとんど山馬毛の良いものは入手困難となっています。

・豚毛



刷毛として用いられ、毛筆としては数少ないです。

・胎毛

胎髪は、出産後初めて刈る頭髪で柔らかなことが特徴ですが、どちらかというと趣味的、記念品的性格のものです。

他に雉・山雉・孔雀・おしどり・白鳥・鷺・雁・鴨・カナリヤ、鳥などの毛が用いられ、植物では、竹・木・檜・桜・藁・仙芽・棕櫚・荊・竿草などが用いられます。

4. 筆の種類

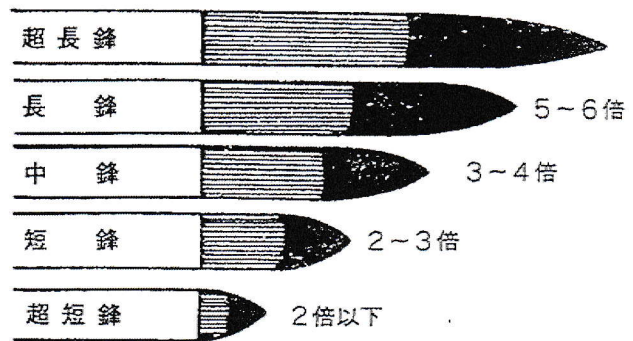
①穂の長短による種類

筆の穂の長短によって、柳葉(超長鋒)、長鋒、中鋒、短鋒、雀頭筆(超短鋒)に分類されます。その他、面相筆、底紋筆、連筆などがあります。

長短（鋒形）によるもの

(長さ)	(直径—長さの対比)
(超)長鋒	凡そ6倍以上
長 鋒	5～6倍
中 鋒	3～4倍
短 鋒	2～3倍
(超)短鋒	0.8～2倍

毛の長さによる種類



②筆の種類

一般的に

剛毫筆 … 馬、イタチ、鹿、等硬い毛でつくられた筆

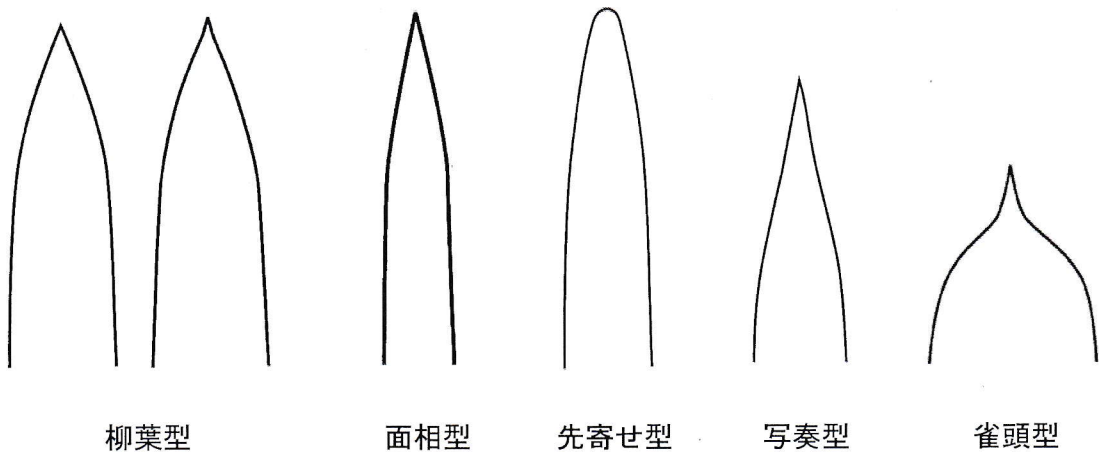
兼毫筆 … 剛毛に柔らかい羊毛を混ぜた筆

純白筆 … 羊毛と白い剛毛を混ぜた筆

羊毫筆 … 羊毛だけでつくった筆

その他、特殊筆（竹、藁、羽毛、草、等特殊な素材でつくった筆）等到大別できます。また、出来上がった穂首の形で柳葉形、面相形、雀頭形、等の形があります。

穂の形のいろいろ



5. 筆管の種類

材 質 ⇒ 竹・木・プラスチック・水牛の角・玉・石類・陶器

仕上げ ⇒ 塗り軸・素物

形 態 ⇒ 両 切 軸 … 竹のみ

糸 巻 軸 … すげ口側を糸で巻いて補強してある軸

両 骨 軸 … 軸の両端に水牛の角やプラスチック、木などの飾りをつけたもの

ダルマ軸 … らっきょうともいい、すげ口を水牛の角やプラスチックなどで太くし、持つ部分が細いもの。または軸全体が木製で、持つ部分が細いもの

面 相 軸 … 段軸

・ 筆管について

筆管（軸）は、ほとんど竹管であり、これにつぐものは木である。その他に、骨董趣味的な実にすばらしい装飾管などもあります。

竹管は白竹を用いますが、斑竹もあります。国産の竹軸としては、千葉県の箭竹をはじめ、兵庫県、岡山県などのものが利用されています。

中国、朝鮮、台湾などは、それぞれ筆管に適した竹を産し、斑竹、豹文竹、棕欄竹、梅羅竹など、その種類も多くあります。

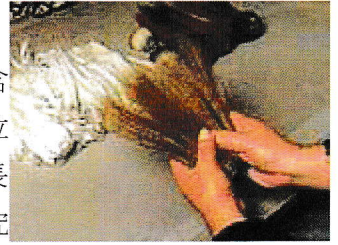
木管材料には、黒檀、紫檀、桜、欒などを用い、これに彫刻を施したり、漆を塗り付けたりして美しく装飾性に富んだものが多いです。

筆管にはいろいろと細工ができ、飾管には、金管・銀管・合金管・鉄管・陶管・象牙管・獣骨管・犀角管・漆管（堆朱・堆黒・螺鈿・乾漆・蒔絵）・彫管・緑沈漆管・鏤管など実に多彩です。

作業工程

工程 1 毛組 (けぐみ) / 選別 (せんべつ)

原毛を筆の細太、柔剛、長短などの用途別に分類し、分類した毛を先の毛、のど毛、腰毛等に選別します。筆の原料となる原毛ですが、柔らかさと硬さが程よく、墨の含みがよい獣毛を数種類より、選びますが、その動物の種類や採取の時期、体毛の部位などによって、微妙に仕上がりに影響があります。千差万別の毛質を弾力、強弱、長短などを別に巧妙に組み合わせて作る製筆技術は、長年にわたる筆匠達の経験と研究努力から生まれるものです。



工程 2 抜き上げ (ぬきあげ)

原毛に、くしを入れて綿毛を取り除き、よく混ぜ合わせます。



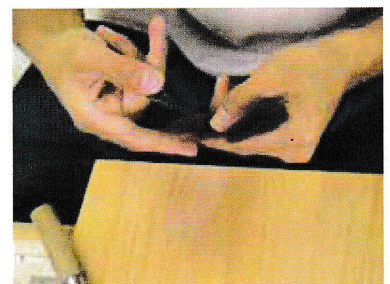
工程 3 毛もみ (けもみ) / つめ抜き (つめぬき)

もみがらを焼いた灰をかけ、熱を加え、鹿皮で毛を巻き、よく揉み、油分を取り、くせを直し、くせの直った毛を指先で少しずつ抜き取り、毛先を揃え、準備します。



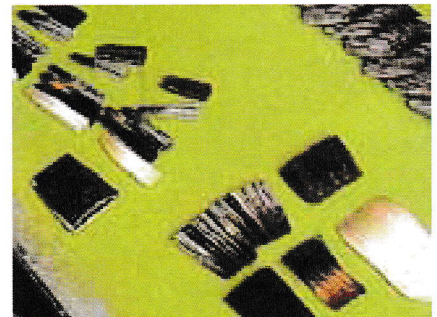
工程 4 先揃え (さきそろえ) / 逆毛取り (さかげとり)

さらに、手金と手板を使い、毛先を揃えます。はんさし (刃のない小刀) で悪い毛を取り除きます。



工程 5 平目 (ひらめ)

先揃えした毛を水に浸し、平たく整えます。



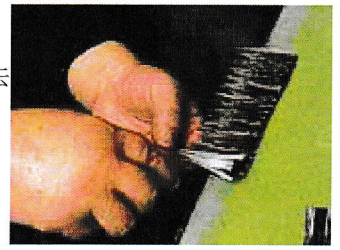
工程 6 形づけ (かたちづけ)

命毛に喉毛、腰毛を各寸法に切り、段々に組合わせ、形を整えます。よい筆を作る微妙な技術と熟練を必要とする大切な工程です。



工程 7 練り混ぜ（ねりませ）

重ねあわせた毛をむらのないように、入念に練り混ぜを繰り返し、先の悪い毛を除去します。



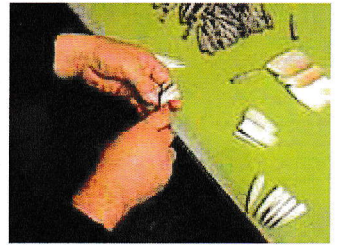
工程 8 芯立て（しんたて）

練り混ぜた毛（芯毛）に糊を加え、穂の太さに分けてコマという筒に毛を通し、太さを決めます。そして自然乾燥させます。



工程 9 上毛着せ（うわげきせ）

薄く延ばした化粧毛などのきれいな毛を、のり巻きのように、芯毛に巻きつけます。



工程 10 葎締め（おじめ）

乾燥した穂の根元を麻糸で縛り、尻を焼きゴテで焼き、強く締めます。この作業で穂首ができあがります。



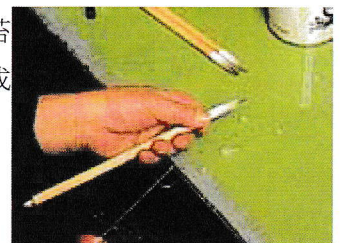
工程 11 繰込み（くりこみ）

筆軸の内部を小刀で削り、穂を接着剤で取り付けます。



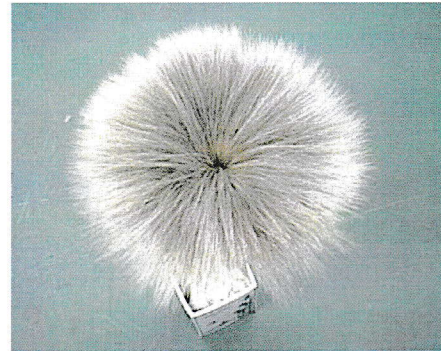
工程 12 仕上げ（しあげ）

筆軸に取り付けた穂に、布海苔（ふのり）を充分しみこませ、糸を巻き余分な布海苔を絞り出し、形を整え乾燥させます。それにサヤをかけ、軸に筆名等を彫刻して完成させるのです。



筆のお手入れ法

筆のお手入れは念入りになさってください。



特大筆の乾かし方

筆の取り扱いには細心の注意が必要です。特に**新しい太い筆**は中(軸の付けね部分)まで十分に乾燥させないと毛が腐ってしまいます。筆は使用后、風通しの悪いところに長時間放置しておくとし、上左図の様に筆の付け根のところが腐って毛が切れてきます。腐った毛は元には戻りません。細心の注意でお手入れをしてください。特に太い筆は中(軸の付けね部分)が乾くまで相当な日数を要します。又、近頃は室内が温かいため、使用後の手入れは一年を通じて怠らないようにして下さい。

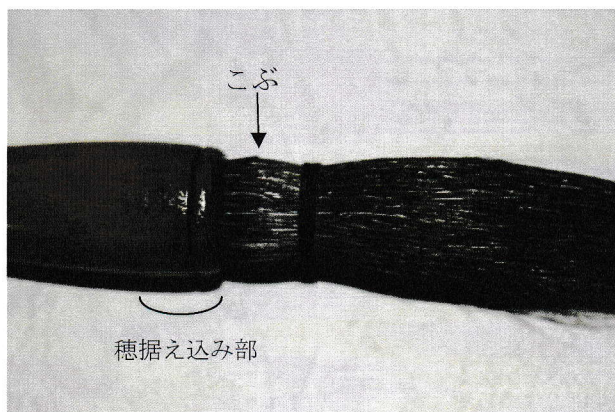
<筆の手入れの基本>

- ① 使用後は必ず筆(穂)の付け根のところを指で押して、墨が出なくなるまで洗って下さい。筆(穂)を容器の底に突き刺すようにして洗うことは、絶対にしないで下さい。
- ② 水気を切り、形を整える。さらに水気を取るために、ティッシュ、ペーパータオル、乾いた雑巾などで押さえて水分を出来るだけ取る。
- ③ 風通しのよいところに吊り下げる。特大筆は日に一度はほぐして中まで風を入れ、その後さらに穂を上にして花が開いた(上右図)ようにして付け根の中まで乾かすようにして下さい。
- ④ 最後に完全に乾いたことを確認しましたら櫛をかけて下さい。櫛は整髪に使用するもので結構です。

以上の手入れをして頂きますと次回も最良の状態でご使用頂けます。
尚、不幸にも左図のような状態になりましたら至急ご相談ください。

筆が割れる

筆の具合が悪いとご相談される方は、筆が割れて書きづらい、まとまりが悪くてハライがきれいに書けない、というご方がほとんどです。筆を見せていただき診断しますと写真の部分が硬くなって、こぶが出来ています。(写真はこぶを強調するようにこぶの傍に糸を巻いてあります。) このこぶは墨(墨液)が固まったもので、一度出来てしまいますと雪ダルマみたいにだんだんと大きくなり、軸を破壊して穂が軸から抜け落ちてしまいます。長時間かけて墨かすを取り除いても内部(穂据え込み部)に固まった部分を取り除かない限り元に戻りません。完全に除去するには軸を壊して穂を作り直すこともあります。修理代も高額になります。



絶対にやってはいけない事は、墨液を付けたまま、カチカチに乾かしてしまうことです。1度でもやりますと、軸の内部(穂据え込み部)に塊ができて筆のまとまりが悪くなり割れるようになります。

筆のお手入れとは穂首の軸に隠れた見えない部分に墨かすを溜めないように洗うことにつきま。洗いは図のこぶの部分(軸の付け根の際)を親指と人差し指で挟んで強く押して内部から墨が出てこなくなるまで洗い、すばやく乾かしてください。

筆(用具)はお手入れしだいで寿命がおおきく違ってきます。

鷺毛堂

がもうどう
鷺毛堂

外商部・事務 〒336-0025 埼玉県さいたま市南区文蔵4丁目27番3号
☎0120-448-556 FAX 048-866-1131
店 舗 〒336-0063 埼玉県さいたま市浦和区高砂1丁目8番9号
☎048-822-1105 FAX 048-824-1922
掛軸・筆工房 〒336-0025 埼玉県さいたま市南区文蔵3丁目36番10号
☎048-845-4701 FAX 048-845-4702